

---

# 修羅の如く

BRUCE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

修羅の如く

### 【Nコード】

N5469F

### 【作者名】

BRUCE

### 【あらすじ】

幕末の時代に無手で戦う武士・玉置豹馬もののふの闘いの日々を愛と友情  
織り交ぜて描く!!

く名もなき十津川郷土の一生涯（前書き）

十津川郷土の玉置豹馬が幕末の英雄らとの出会いと別れ！闘いの日々

## く名もなき十津川郷土の一生涯

### 序 章

#### 一

一八五八（安政五）年四月

空一面に、雲間もない晴天の江戸は浅草。何処かの藩士の様でもない。

といって町人、百姓とも違う見た眼は上下、紺碧色の小袖に、指貫（ぬき）裾を絞る為の紐が着いている袴で其れを絞った状態で足首で纏められて居り、更には其の袴の大部分の太腿から足首の部分が膨らんで足首から下は被っているので絞った紐跡は普段は見えない様に成っている。平安時代の貴族男子の普段着の様な常日頃の服装で在る）を身に纏った姿をしている。

頭髮は月代（さかやき）を剃り上げずに一束に後ろで結わえている。総髪にして肩の処まで延ばし垂れている。

素足には晒し（ひやひ）晒し・さらして白くした綿布）を甲と裏に巻き着けて足首の爪先と踵以外を保護している。眉目秀麗にして眼光炯々人を射る其の武士は身の丈、六尺三分（もののふ）百九十一センチメートル）とい、う当時としては可成りの大柄な漢（おとこ）で、膂力（りき）が非常に強く、如何にも自信の在る武人らしい表情が色男の印象を与えない。

笑った口元には甘さも在るが、厳しい武術鍛錬され、軀幹偉大にして深沈（しんちん）広闊な兵法者としての眼差しを秘めた武士の持つ熱歩さ、

洒脱な明るさが此の若武者の特長だ。

名を玉置豹馬鷹斗と云う。タカトウ

豹馬は山刀とも見紛う武骨な一刀身一尺八寸（約五十四センチメートル）の無名乍らも、脇差しを一本、背中越しに無造作ぶち込んでいる。

（儂は、わい此の地上で最強の武人になったる！何時の日か必ず、新陰流を地上最強だと云う事を知らし示したるんやああ）

豹馬は幼き頃より指南役でも在る父の玉置兵武之助ひょうぶのすけとしむね、祖父の玉置晋太郎忠鷹たろうただたかの二人から武術指導を承けている。

また、師父で在る晋太郎のお師・柳生連也蔵包から伝承され、新法の剣豪とい、う創業一筋を玉置家では代々受け継いでいるのだ。

其れを何時も如何なる時も心に秘め、豹馬は勇猛心を奮い起こしている。彼は郷里中十津川村を離れて、諸国の一つ一つを様々な剣術道場、居合道場、体術道場や更には忍び里の忍術など数々の兵たちとの闘いの日々を重ね続けてきた若武者。

だが、金子も段々と乏しくなり宿も旅籠屋から野宿をし、食べる物も宿飯から茶店の串団子、笹団子や握り飯経となり、町村の農民、漁獵民たちの下働きや人手の少なくなった処や野盗、海賊、山賊などに困っている者たちの退治する為の助太刀などをしては食いつなぎをしていた。

其の御礼にと云って、桃、栗、柿、芋や時には麦、粟、黍、豆（当時は白米＝米などは、年貢米と云われた時代だった為、貧困に

喘いでいた農村部は口にする事など殆ど無かったと云われている。  
因みに五穀とは米、麦、粟、黍、豆の五つの穀物を云い、重要な穀物で在る）などの貴重な食べ物の中から分け与えて貰い、豹馬は空腹を凌ぎ乍漸く此の武蔵まで辿り着いたのだ。

（江戸へはもう直ぐや。此処までの道のりを様々な人々の出逢い助けが在ってこそ、辿り着いたんやあ。もっとも兵どもと戦つて強い漢おこに成るんやああ）

豹馬は己に云い聞かせる様に自問自答を如何なる時も思案して居る。

だが、流石の彼も金子や餓えには負けてしまいそうに成る事も在り、金子を遣り繰りし乍切り詰め切り詰め乍も此の武蔵まで辿り着いたのだ。

## 二

豹馬は中山道の信州小田井の宿場を出たのが、二刻半を過ぎていた頃だろうか。

落ちゆく陽が赤く染めた豹馬の顔は、幾たびかの兵つわものらの死闘に燃ゆる武士もののふの眼光炯々で人を射る時の眼差しとは、寧ろ屈託のない好青年の表情を浮かべていた。

浅草には軒並みに木賃宿が在ると江戸へ入る途中の茶店の一ぼ、

て、つ、と小肥<sup>こふと</sup>りで陽灼けした長年、此処で商売をしてきたといった顔にも軀にもすっかり染み着いてしまっている。

豹馬よりもはるかに背が低い方だろうか、ちよつと小粋で小柄な年の頃は七十前半の老女から教えられた豹馬は宿を取る事を決めた。

「あのお、叔母さん。すみませんが、儂<sup>わい</sup>は武者修行中の身で此から江戸へ行くんやけれど、江戸の何処ぞに安くて御店の人間が良く働き、気が良くつく様な宿をご存知おませんか、出来たら腹一杯に飯が喰える処がおましたら、紹介して貰われへんやろか!？」

「やだよお兄さん。こんな婆さんつかまえて、叔母さんはないだろうよ。で、江戸は初めて来なさんか」

「はあ……。あつ、最近漸く、江戸まで金子を切り詰めて、此処まで遣つて来たんですね」

「ほお。何時、江戸に行かなさるか。だったら、浅草辺りの木賃宿に泊まりなよ」

老女から教わった豹馬。

「あ 浅草あ」

豹馬は其の小粋な老女の応えが僅かに疑心な聞き返し方をした。

「おおよ。浅草は帝釈天には軒並みに木賃宿が在るんだ」

「浅草ですか」

「まああ。騙されたと思うて、浅草へ行くがえええ」

其処は浅草帝釈天参拝に訪れる諸国の信徒たちが何日、何十日も小銭を切り詰めたり貯め込みをして浅草帝釈天に参りする者たちの為の宿屋が在る。

「そしたら早速、浅草を目指して歩き出すとするか……」

彼は其の数在る幾つもの木賃宿の中から一軒を眼に停めたのが、『笹乃屋』とい、う木賃宿屋にしては御店が割かしら大きな店構えをしている。其の『笹乃屋』に決めた豹馬は早速御店の紅色に白字の笹屋と書かれた暖簾を潜り御店の中へ入った。

「ご 御免」

豹馬が店先で、声を掛けると

「へえっいらっしやいまし」

若い女将らしい女性が対応に出て来る。

「……」

一瞬、豹馬は其の女性の艶の在る声音と美しい容姿に見蕩れると

「うちでお泊まりどすかえ」

につこりと笑みを浮かべ乍女将に訪ね聞かれる。其の女将には品が在り、何処となくそやとした立ち振る舞いをする女性だなあと、豹馬は思った。



「うん。実は、今、此だけしか持ち合わせがおませんが、此で何日分泊まる事が出来ますやるか……」

豹馬はそう女将に尋ね乍、小袖の懷に右手を差し入れ黒水牛の皮を嘗めた革で細工された入り口を紐で締め、何十かに巻き付ける一巾着袋（小銭を入れて財布の代わりに使ったり、小物類を入れて持ち歩く袋の事を云う）を取り出して、女将に見せ様とすると

「御客様。当『笹乃屋』は何の様な、御方でもお安くお泊まり頂けますよって。どうぞ、お上がり下さいしへえ」

そう云って、女将のお千代が応対に出て来た。

「……」

豹馬は、此の女将ひでの接客の気配りや心遣い、仕草、艶の在る声音と言葉遣いに、此の女将ならばきつと宿賃の事などで心配をせずとも、武者修行に専念する事が出来るのではないかと思わせるものが、一お千代（女将）としての気遣いが軀全体から伝わって来るのが解るほど……。

「ささああ。お武家様、どうぞご遠慮は入りませんへえ。お一人様のお泊まりどすえ。お咲。足桶と手拭いを二枚を用意をして持ってきてお呉れやすえ。お武家様、直ぐにご用意致しますえ」

お千代は豹馬の懷から取り出された巾着袋の小銭をゆつくり戻し乍、足桶と手拭いを運んで来たお咲のいる所へ手で指し示した。

「さああ。どうぞ此方で御使い下さいやすえ」

お千代は豹馬に黒光りする床板の前に置かれた足桶にゆつくり歩み寄った。

そして、豹馬は利き手の左手で、背中越しに無造作にぶち込んでいた山刀とも見紛う武骨な刀身一尺八寸の無名乍の一本の脇差しを抜き取り、其の黒光りする床板に置くと同時に床板に腰を降ろした。

「……」

「御武家様。御足をどうぞ、桶の中へ御付け下さいまし」

十三、四歳位の可愛らしい娘仲居のお咲が、豹馬に声を掛けて足桶を挟んで前屈みに成って、腰を降ろし足桶の中に浮いている足洗い用の手拭いを手に仕様とすると

「わ　儂<sup>わい</sup>は己の事は己自身で足は洗うよって、氣遣い無用やでえ。あんたさんの其の優しさは、有り難く頂いておくわあ。本<sup>ほんま</sup>当におおきに、有難うさん！」

豹馬は其の健気な可愛らしい娘のに対して、心と裏腹な態度を取ってしまった事に少し申し訳なく思い、少し照れ臭そうにし乍、お咲の手に持っていた手拭いも気に止めずに己の手で慌てて足首に巻き着けていた晒しを、手早く然も丁寧に解き終えた足首を足桶に双足をつけて己の手で洗い上げた。

女将のお千代の双手には真新しい手拭いを持って、豹馬の洗い終えるのを待っていた。

「……」

豹馬はお千代の手から真新しい手拭いを素早く取って己の双足を丁寧にも、手早く拭き上げた。

「……」

「……」

「……」

お千代、お咲や番頭ら他の使用人たちも思わず豹馬の滑稽な行動に見とれて、あ然としてた様に『笹乃屋』従業員の殆どが、彼の一拳手一投足まで見守っている。

誰かしら其の一瞬の間を置いて、自然と

「ふふふっ」

「ふふっ」

「はははあ」

などと、皆が笑い合っていた。

「あつ。い……いやああ………」

豹馬は照れ笑い顔で、少し気恥ずかしそうな面持ちで、頭を少しかきあげていた。

「ふふっ……えろっ。すみませんへえ。御武家様の様な御方は、私<sup>うち</sup>

其の御客様では恐らく、おいやせんでしたものでつい、嗤<sup>わら</sup>うたりして本<sup>ほん</sup>当<sup>んま</sup>申し訳<sup>わけ</sup>ご座<sup>ざ</sup>いませんえ。私も此の浅草で長い間、商<sup>あきな</sup>いをさせて頂<sup>たの</sup>いておいやすけど、本<sup>ほん</sup>当<sup>んま</sup>に初めて眼<sup>め</sup>にしたものでご座<sup>ざ</sup>いますねんえ。つい、御武家様の様子を見入<sup>みい</sup>っておりやしたゆえへえ。誠に申し訳<sup>わけ</sup>ご座<sup>ざ</sup>いませんですえ。こう云う場合は矢<sup>や</sup>つ張<sup>はり</sup>り御手<sup>ごて</sup>討<sup>う</sup>ちどすかえ……!？」

「いや。其の様な事は儂<sup>わい</sup>は致<sup>いた</sup>さへん。其処<sup>そこ</sup>ら辺<sup>へ</sup>に居<sup>ゐ</sup>とる阿保<sup>あほ</sup>な侍<sup>さむらい</sup>どもみたいな事は、儂<sup>わい</sup>は絶<sup>ぜつ</sup>対<sup>たい</sup>にせいへん。そんな阿保<sup>あほ</sup>な事をしでかしたら、祖<sup>じい</sup>父<sup>ふ</sup>様<sup>さま</sup>や父<sup>ちち</sup>上<sup>じやう</sup>から大目<sup>だいめ</sup>玉<sup>たま</sup>に合<sup>あ</sup>うさかい……」

豹馬<sup>ひょうま</sup>は、お千代<sup>ちよ</sup>代<sup>だい</sup>には嘘<sup>うそ</sup>は云<sup>い</sup>わんと云<sup>い</sup>う、鋭<sup>えい</sup>利<sup>り</sup>な刃<sup>やいば</sup>物<sup>もの</sup>の様<sup>よう</sup>な一瞬<sup>いつしゆん</sup>、人<sup>ひと</sup>を射<sup>や</sup>る眼<sup>め</sup>差<sup>さ</sup>しで応<sup>こた</sup>答<sup>た</sup>える。

「……」

お千代<sup>ちよ</sup>代<sup>だい</sup>は一瞬<sup>いつしゆん</sup>、其の眼<sup>め</sup>差<sup>さ</sup>しにドキツとして喉<sup>のど</sup>の中で唾<sup>つよ</sup>が乾<sup>かわ</sup>ききつてゐる事<sup>こと</sup>が感<sup>かん</sup>じられるくらいに心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>で驚<sup>おどろ</sup>愕<sup>がく</sup>してゐた。だが、直<sup>ただ</sup>ぐ様<sup>よう</sup>、豹馬<sup>ひょうま</sup>の一面<sup>いっぺん</sup>は元<sup>もと</sup>の好<sup>こう</sup>青<sup>せい</sup>年<sup>ねん</sup>に戻<sup>もど</sup>つてゐる事<sup>こと</sup>に氣<sup>き</sup>付<sup>つ</sup>いた。彼の正<sup>ただ</sup>に武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>とし<sup>もの</sup>た一面<sup>いっぺん</sup>で在<sup>あ</sup>ると、お千代<sup>ちよ</sup>代<sup>だい</sup>は彼<sup>かれ</sup>が、其の無<sup>む</sup>双<sup>そう</sup>無<sup>む</sup>敗<sup>ぱい</sup>の兵<sup>へい</sup>法<sup>ぽう</sup>者<sup>しや</sup>の二<sup>に</sup>面<sup>めん</sup>性<sup>せい</sup>を垣<sup>かき</sup>間<sup>ま</sup>見<sup>み</sup>たので在<sup>あ</sup>る。

女<sup>お</sup>将<sup>千代</sup>を筆<sup>ひつ</sup>頭<sup>だう</sup>に、笹<sup>ささ</sup>乃<sup>の</sup>屋<sup>や</sup>の使<sup>し</sup>用<sup>よう</sup>人<sup>にん</sup>た<sup>ち</sup>（番<sup>ばん</sup>頭<sup>だう</sup>、小<sup>こ</sup>番<sup>ばん</sup>頭<sup>だう</sup>、丁<sup>てい</sup>稚<sup>ぢ</sup>など  
の奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>人<sup>にん</sup>の）も、手<sup>て</sup>をついて頭<sup>かぶ</sup>を垂<sup>た</sup>れて豹馬<sup>ひょうま</sup>に對<sup>たい</sup>して謝<sup>しゃ</sup>罪<sup>ざい</sup>をす<sup>す</sup>る。

「い いや。かまへんでえ……。女<sup>お</sup>将<sup>千代</sup>さんや他<sup>ほか</sup>の使<sup>し</sup>用<sup>よう</sup>人<sup>にん</sup>の方<sup>かた</sup>々<sup>々</sup>に、そんな事<sup>こと</sup>をさせたりしたら儂<sup>わい</sup>は氣<sup>き</sup>にしとらへん」

「本<sup>ほん</sup>当<sup>んま</sup>に、えろう申<sup>まう</sup>し訳<sup>わけ</sup>ご座<sup>ざ</sup>いませんえ」

お千代の後につき使用人たちも、声を揃えて謝罪をする。

「申し訳ございません」

「儂こそ、すまないなあ……」と思とる。せつかくの気持ちに對して、堪忍やデエ。本当に、儂。此方の宿に泊めて貰うかまへんやろかなあ……」

豹馬は恐縮し乍小袖の懷中から浅井色の手拭いを取り出し、頭をかき、照れ臭そうにする。

「へえ。御武家様、勿論何方様でも此の『笹乃屋』に御泊まり頂けますえ。ささ、どうぞ御上がり下さいましえ。お咲。此方の御武家様を二階の部屋の鳳凰の間へご案内し、お通して御呉れやすええ」

お千代は、お咲に云い付けて豹馬を二階の鳳凰の間へ案内させる。

「<sup>ほんま</sup>本当に、かたじけないでえ……。ほな、泊めさせて貰うわあなあ」

豹馬は黒光りする床板から腰を上げ乍、武骨な脇差しを左手に持つて立ち上がり女将お千代や使用人たちにも頭を垂れてからお咲の案内する二階の奥部屋へ一緒に階段を登り上がって行つた。

「御武家様。此方が、御部屋でございます」

木賃宿にしては、キッチリ清掃が行き届いており。二階廊下の床板も丁寧な米ぬかで磨き込まれている。床板は黒い光沢の在る床板に仕上がっている。又、各部屋ごとに、柱、障子、襖、天井に至るまで雑巾がけされており塵一つない清潔な宿屋で在つた。

豹馬は木賃宿や安宿などは皆、汚れていて湿気、<sup>かひ</sup>黴臭く、蜘蛛の巣だらけと思っていたのだ。

お咲の案内で、奥部屋の鳳凰の間の前で一旦立ち止まり、ゆつくりと黒光りする床板廊下に腰を下ろしてから其の儘、正座をしてから彼女は鳳凰の間の障子を引き開けて彼が部屋へ入るのを待った。

## 続きの(2)(前書き)

お千代を筆頭に木賃宿『笹乃屋』の奉公人たちとの出逢い、触れ合い乍も、様々な事が待ち受けている豹馬の江戸での第一歩が此処から始まる……!!

## 続きの(2)

豹馬は此の『笹乃屋』とい、う宿に驚かされた。まるで、何処かの立派な旅籠かと見紛う程に手入れされている建物にも内装にも実にしつかりとした管理を成されている事に感心させられた。

(此ならば、充分に修練にも身が入りそうやなあ……。だが、儼には勿体無い位の部屋に環境やなあ)

豹馬は仕切りに感心し乍、江戸へ入るまでの幾つかの木賃宿に泊まったが、『笹乃屋』程の木賃宿には未だ嘗て無かつた事だった。其れだけに、彼は此の安心感に感無量の心境で在った。

「おおきにありがとさん……娘さん。当分の間、此処でやつかいに成るよつて。まあ……宜しく頼んます」

豹馬は、お咲の面を優しげに見つめて云う。

「は はい。ようこそお出で下さいました。何かご座いましたら、何なりと此のお咲にお申し付け下さいませ。其れでは、失礼致しました」

お咲は二階廊下の床板に正座をして、三つ指を付いてから頭をゆくりと、垂れ下げ丁寧ていねいに挨拶をし終える。そして、双手で障子を閉める。

其れから、女将のお千代と番頭の松之助が挨拶にやって来た。丁寧にくどくどと時候の挨拶を述べたあと頭を上げ、



「この度は、此の『笹乃屋』に御泊まり頂きまして、誠に有難うご座います。当宿女将の千代にご座います。御手数ですが、宿帳に御名前などを御記帳を、御願ひ申し上げますとすえ」

お千代と番頭松之助が丁寧にあやうしてから宿帳を携えて来た松之助は、お千代に宿帳を手渡した其の手から手へ豹馬に手渡された。

「あつ。儂武者修行中の玉置豹馬とい、う者やあ。まあ……以後、宜しゅう頼むわあ」

豹馬は姓名を名乗り乍、さらりさらりと、勢い良く其の見事なまでに宿帳に署名を済ませる。

「御武家様、いえ。玉置様は剣術修行を、成されておいでですか……。其れに、御軀の方も可なり大きゅうご座いますなあ。さぞかし名の御在りの御方どすかえ」

「あつ、いやああ……儂は剣は、けんでも、儂が使つのはこつちの拳やねん……」

豹馬は、紺碧色の小袖の左袖を腕捲りをして、其の左腕は厳しく鍛えれた体軀と忍耐氣力が充実して生まれた左腕を見せる。

「玉置様も、今や江戸市中の剣術道場、体術道場、居合道場など様々な侍たちが、諸国から修行に上京してはるんどすえ」

「あああ、せやなあ……」

「そうすると、玉貴様も江戸へ修行なさりに、おいやしたんどすかえ」

「ああ。儂は、此の地上の国々で最強の武人として、新陰流を地上最強だと云う事を確かめたいんやあ」

「まああ。其れは、物凄い御考えを御持ちどすな……。でしたら、此の『笹乃屋』の女将千代も微力乍も、玉置様を応援させて頂きますですえ」

お千代は優しい笑顔で、豹馬の志しを支え様と心に誓う。

「女将さん。おつきに有難うさんやでえ」

「……」

豹馬は此の女将さんならば、安心をして信頼が出来そうな魅力が、垣間見れたと思った。

「其れから、お千代さん。此の近辺に、儂が修練の稽古が、出来る場所がおますか」

豹馬は部屋のド真ん中に、ドカツと腰を下ろし胡座をかいている。

「へえ。いかほどの広さが在れば、よろしおすかえ」

「せやなあ……。丸太ん棒が縦横無尽に扱える位の様な処が在れば、最高に有難たいが、其れに付近に檜の木が植えられている処が在り、檜の木は二、三本在れば好都合やなあ。そんな処が在りますかなあ」

豹馬が、お千代に訪ね聞いて見る。

「其れでしたら、此の笹乃屋の中庭に、櫨の木が植わつとりますえ」

「ええつ。ほつ、ほんま本当にか、い 今直ぐに、中庭を見てみたいなあ」

豹馬は余りにも、こんなに早くにも、条件が叶いそうな処が在るなどとは、思いもしなかつた事から、胡座を解いて左足の膝を付いて、ほんの少し興奮気味に云う。

「でしたら、玉置様、此の部屋からでも、中庭が覗めますよつて、どうぞ、ご覧下さいましどすえ。其方に、ご座います障子から見えますえ」

お千代が右手で、指し示す左てに、窓枠に障子が在つた。

「えつ。」

豹馬は指し示された、左側を勢い良く、向きを変え乍、立ち上がり障子を素早く引き開けると、其処から中庭が見渡せ、左下方向に中庭が在り、中庭に櫨の木が数本が植えられている。

「こつ、此だけの広さが在れば毎朝夕の稽古が出来るわあ……。お千代さん、ほんま本当に有難うさん」

「いえ。喜んで頂けて私も、其れだけで客商売をしたきたどすさかいに、冥利に尽きますどすえ」

「いや。此方こそ、無理を云うて堪忍やでえ」

「いえいえ、其れはよろしおしたどす」

お千代と松之助は、豹馬のまるで無邪気な、子供が好きな菓子か、或いは玩具を与えられて喜ぶ様な、眼差しに二人は優しげに見守る親御の様に見つめている。

「玉置様。其の中庭から、どれでも櫓の木二、三本を、ご自由に御使い下さいましえ」

お千代は豹馬の武士らしからぬ、行動力的な部分知力などが、言葉の端々に表れているのが長年に渡って、客商売人としての観察する眼で、見ていた。

「女将さん。お千代 本当ほんまにええのん」

「へえ……」

「おうきに有難うさん。甘え序でに、大工道具が在れば貸しよう頂ければ有り難いが……」

「へえ。よろしおすえ。ですが、其れでしたら三軒裏の大工職人がおりますよって、職人の名は吉兵衛とい、う者が住んでおりますえ」

「えっ……」

「玉置様の武術修行の御稽古の道具作りの相談などを、為さつたら宜しおすえ」

お千代から忠告を、された豹馬おひこの眼の色の煌めきを帯びた輝きが、闘いに燃える漢おこの持つ、いやっ。正に修羅の如く、強い漢に合いた  
いと…………

お千代が、幼き頃に祖祖父が京の都で宿屋を営んでいた頃に、訪れたひとりの若き剣豪が、宿泊をした時の話を思い出していた。

## 回想

「其の御方は、素人にはわかり得ぬがなあ…………其の方の剣気……まるで、抜き身の真剣の様じゃたわい。これほどの剣気を放つ者など……まさか、と思うたものじゃたわい。其れから数日後に其の御方が、京だけではなく、日本中各地に名を馳せた『宮本武蔵！』……じゃた」

お千代は、ふと、祖々父から聴かされた話を思い出していた。  
此の若き武士には眠れる獅子が、いやっ。阿修羅が軀に宿しているのではないか、そんな風に思えた。

（きつと、此の御人豹馬）は恐らく世間のどの侍たちよりも、宮本武蔵に勝るとも劣らない強い漢に成らるんどすえ）

お千代は確信めいた様な心境で在ったのだ。

「お千代さん。おうきに有難さん。本当に助かったでえ…………」

「玉置様が精進をされる事は私の喜びうちにさせて、御呉れやすえ。  
お千代は、玉貴様の第一の応援団で、ご座いますえ。ですから、玉貴様を応援させて頂きますえ」

「……」

二

或昼下がり、豹馬は何時もの様に『笹乃屋』の中庭で、一木人（櫓の木の手作り稽古人形）を相手に新陰流奥義を新たにする新技を試行錯誤していると、七、八人の志士風の男たちがどこかかと店に入ってきた。

「俺らは、十津川郷士の者だ。王政復古に必要な金がある百両ほど借用したい」

「私<sup>うち</sup>には金の成る木はありまへんどすえ」

「蓄えがあろう、其れを出せ」

「もつと大きな店<sup>たな</sup>に行つておくれやす」

「何だと、我らをあなどる気か、ただでは捨て置かぬぞ。僅か百両じゃ、出せ。出さぬと店の客にも迷惑が係り及ぶ事に成る」

豹馬は無心に櫓の木木人を敵と想定しての稽古に余念がない。其処へ娘仲居のお咲が中庭に慌てふためき乍彼を呼びに駆けつけた。

「た 玉置様。大変なんです、直ぐに御店の方に来て頂けませんか。女将さんが、十津川の御武家様に……兎に角早く早く来て下さいまし」

お咲の慌てふためき様に、豹馬は何かを感じ取り、取り急ぎ衣服を整え乍、御店の店先に廻って観ると確かに、七、八人の志士風の男たちが居た。

「さあ。金を出し貰おうか」

志士は刀を抜こうと刀柄に手をかけた。豹馬は鐔を押さえた。

「な 何だ、貴様は」

「十津川郷士の者やあ」

「ド ド出かい……」

豹馬を見上げて余りにも、大柄な八尺三分（当時の男性身長の平気より比べると、はるかに高い。百九十一センチメートルの豹馬の）もゆうに在る男が居る事に驚く志士たちだったが、此处で怯んでは、百両の金を見す見す逃がしかねないと思った。

「何だと」

「一おどれら（お前、貴方などを大阪弁の一つで相手を威圧する言葉で在る）の顔は見た事が在らへんでえ」

此处で新陰流の玉置豹馬を名乗れば、志士たちは逃げて行ったかもしれない。

「俺らを偽物扱いするのか、許さん、表に出ろ」

「出てもかまへんのけ」

「己、我々を甘く見ると臍ほそを噛むぜ」

「臍を噛むのはどちらろなあ」

「えええい。表に出ろ、百両は用意しておけよ」

と云つて志士たちは表へ出て豹馬を半円形に取り囲んだ。

「おんどれが十津川郷土だと、儂わいは見た事が在らへんで」

豹馬は志士たちに対して新陰流無刀取りの『一円』の構えを取り、七、八人の志士たちの太刀先に身を置いて居た。『一円』の構えを見せた豹馬に、僅かな乱れもなく、無刀取りの極意は、間合いを観察する間積まじももりに在った。我が身を切らせる間のうちに敵の太刀を近寄せ、敵が切り込んで来る太刀筋の方向を確かめつつ、其の斬り出す動きの拍子を読んで動きの裏を取らねばな至難の技で在る。

『一円』の構えは、敵を一刀両断の動作に誘い込む為のもので在った。此方が立ちはだかつて要るよりも、まん丸に背を表し身を手鞠の様に低めにしたほうが、敵を誘いやすいのだ。

豹馬は地面を滑る様に前へ出て、摺り足で真つ直ぐ間合いを詰めて行く。彼は足取りをよどませず、前に出て行く。

軽い摺り足の動きが、七、八人の志士たちには眼に見えない磐石ばんじやく



の障害を蹴り碎いて迫って来る、威力に満ちたものに思える。

七、八人の志士らは信じられない光景を見る様に、猫背の様に丸められた豹馬の動作に眼を見張る。軀幹偉大な武人は、窮屈そうな姿勢で志士らの剣尖の届く撃尺げきしゃくの間合いに踏み込んで来た。

剣客が太刀を振り下ろす速さは、人の動作とは比較にならないものだ<sup>と知り乍</sup>、間合いを詰めて来る気持ち<sup>が</sup>、志士たちには全く持つて理解出来ない。

（二千年以降のHollywood 映画会社が日本古武道についての映画製作されて大ヒットしたのが『last samurai / ラストサムライ』だったのは読者の方々もご存知だろう。

映画製作された際、刀を振る実況を最新鋭の高速カメラ撮影で捉え様とした。

hand gun「拳銃」リヴォルヴァー「シリンダーが回転式を云う」オートマチック「自動拳銃を云う」などが存在している】  
gun belt 又は、gun holster / 「名」ホルスター【ベルトにつるす革のピストルケース】から抜く早さが、最高記録で0.3秒と云われている。

彼のHollywood starでも在り、名監督と云われるクリント・イーストウッドが、実際に早撃ちで有名な話した。

彼は映画『荒野の用心棒』、『夕陽のガンマン』などで見せる名づてのガンマン役をスタントマンを使わず、本人が自ら演じて見せている。

因みに、イーストウッドの早撃ちの速さは0.4秒とも0.5秒とも云われている（公式には書かれていない）。

だが、イーストウッド以上に凄い男がいたのだ。

其れが俳優でも在り、シンガーのサミー・ディビースは早撃ち

大会で優勝を果たしているほどの名うてで在った。

【因みに彼の速さは0・31秒と云われている】可成り、本題とかけ離れたいでに、漫画やアニメ化されている。『ルパン三世』に登場する早撃ちガンマンで知られ、ルパンのよき相棒の次元大介は早撃ち0・3秒とも0・2秒とも云われているが、公表されているプロフィールには、現在は0・3秒に統一されている。ドヒヤーツ！完全に作品からかけ離れ過ぎたなあ……………！！！！其のhand gun拳銃をHolsterから抜くSPEEDが、最高速度が0・3秒に対して、日本刀を上段から斬り降ろす速度が0・1秒程度で在ろうと予測したが、実際には八十分の一秒で在った云う。物凄いSPEEDが計測された）

豹馬は上目使いに七、八人の志士たちの全ての拳を見つめている。視点が、ぼんやりする（ぼやける）ほど烈火の如く力を込めて、睨み付けていると、軀中が大きく柔らかな何者かに抱き抱えられている様な、心持ちよき法悦がFull-timeの様に胸の中の厚き熱の様になって居るのが解るぐらい。豹馬には志士らの剣尖が己自身に届く危険な領域が軀に染み込んでいるほどに

（新陰流奥義の一つ、無形の位はお前の様な年頃に覚え込めば、一生忘れる事はない。剣尖を交え様とする時に、お前は敵の何処に眼を付けるか、それは二星じゃ。【二星とは両眼さんけんの事を云う】兵法の目付は二星で在るのじゃ。良いか、其の二星を、もつと詳しく申せば敵の動きを見て取る為には、三見の大事と申す事が在るのじゃ。此の三つを子細に見ておれば、敵の動きは自ずから見分けられて参る。だが、お前の様な初心のうちは、三見のうち太刀先を見れば其の動きに心を惑わされる。また敵の顔を見れば、恐ろしゅう成ってくる。初心の者は、敵の拳を見て居るのがなによりじゃ。拳さえ眼を離さずに見詰めて居れば、敵が何処へ打ち込んで来るかがいち早く解る。良いか……………」

豹馬の祖父晋太郎の教えを、忠実に再現出来る位に見極められ、  
躊躇<sup>ためら</sup>わずに其の儘、軀は行動し足先を滑り込ませるのだ。

先ず、一人目を肘打ちへ 敵に肘を食い込ませる。

斬る様に討つ。肘討ちは云わずと知れたムエタイのオリジナルテクニクで在る。

ムエタイの試合を見た事の在る読者ならば納得するだろうが、ムエタイの肘討ちは凶器其のものの破壊力を秘めている。空手や古武道にも肘討ちは存在するが、使用される頻度の点ではムエタイの肘討ちは、『討つ』というよりも、寧ろ『斬撃』と云う言葉こそがふさわしいSHARPな使い方をするのだ。打つ角度も千変万化意外な距離から意外な角度で打ち倒しに来る。当然、knock down制の総合格闘技においても、肘討ちは軽視する事が出来ない技術として云える事だろう。を接近戦でのつなぎ技で在り、豹馬は肘討ちは、構えた状態から水平に打つ技術で在り、最も基本的な肘討ちといっても過言ではない。隙のない軌道で打つ。

投げという視点から見た場合、肘討ちを打ち終わった瞬間は隙だらけといっても良い状態となる。

其の志士と正対した状態から志士の首を上から抱え込む様にがちりと絞める技をする。其の為、志士の体勢が低くし乍、此の技を決める事は困難で在る。（敵の首をがちりと絞りめする時、抱え込む手の拳を強く握る。更に、拳を右に回転させ乍手首を返し、敵の喉仏を下から突き上げる様にして圧迫する事が大切で在る。と同時に、攻撃側は己の腰を前に突き出し、背中を後方に反らせる様にして、敵の上体を浮かす。こうする事で、自然と喉仏への圧迫は強まり、敵の動きは完全に停止する）と、二人目の志士が攻めて来たのを最小限で停めてから豹馬は間合いを詰めて衝撃力を下げて、

敵が前に出て来るのに合わせて、彼は右足で停止への前蹴りを繰り出し、豹馬は敵の膝のやや上部分に、押し込む様に蹴り放ち、彼は素早く右足を戻す。透かさず戻した右足を軸足にして、受け手で在る志士の前足に左低めの下段蹴りを放った。

豹馬が受け手の志士の胸元に右掌底正拳を放ち、此の右掌底正拳は、次に放つ右中段蹴りへ繋げる為のリード正拳（間合いを計る為の正拳）で在るのだ。彼が受け手の左脇腹に右中段蹴りを決める。

三人目の志士は右側面から上段に構えからの斬り込んで来たのを豹馬は、瞬時に左へ交わした体勢で左足を軸足し、右からの廻し蹴りを、其の志士の顔面へ蹴り飛ばして直ぐに、左右から志士たち四人による一斉攻撃を、彼ら四人が刀柄に手を掛けて、各々が刀を抜き出す前から動きを見切っていた。其の前に豹馬は四人目の左端の志士の顔面に正拳を打ち込むと、前歯上下を碎き散らし、門鳥を打っていた。豹馬と眉間にシワを付けて睨み付ける真ん中の志士の軀が絡み合っている。豹馬と睨み付けている志士を見守っている其の時、天高く何かが空中に飛んでいた物が円を書き乍、地面に落ち、其れが抜き身だと知って、息を停めんばかりに眼を見開いた。豹馬の左手が五人目の志士の背を抱え、右手に何時の間にか抜いた鎧通しが、脇腹に突き付けられていた。次に右側の六人目の志士対して左に身構え、左上段から斬り下げにきたのを、瞬時に交わし乍、豹馬は直ぐに右上段蹴りで返して薙ぎ倒した。八人全員を叩きのめしていた。次に七人目の志士との間合いを詰める豹馬。双方とも、一歩歩み出せば相手の前足に己の腕が届く位置で身構える。此の状態は、ぶつかり（\*タツクル）を決めるのに適した間合いだ。豹馬は、此の距離からのぶつかりに出るタイミングを計り、七人目の志士が上段から斬り降ろす。其の瞬間、豹馬は体勢を一気に低くして、右足を大きく踏み出す。其の志士が前足を後ろに引いたり、上段からの刀身の速さで斬り降ろしてきて防ぐ前に、豹馬は素早く水平に移

動して、志士の軀を密着させてしまい、豹馬は志士の前足を両腕で抱え、己の胸元に引き付ける。此の時豹馬は、己の頭部の左側面を志士の腹部付近に押し当てる。此の体勢から、豹馬は志士の右足を己の左体側に出させ、右腕で其の志士の右太腿を抱えたまま、左腕で膝下を抱える。其処から前進し、右足で志士の軸足刈る。そして、豹馬は志士が仰向けに倒れている軀の上から馬乗りに成つて、連続で左右の正拳で顔面を強打して、其の志士の顔がひん曲がっていた。其れを見ていた最後の志士は豹馬の形相を見入って驚愕していた。だが、此の儘では自分自身の命が危ういと感じて刀を抜刀して、豹馬目掛けて突きに來たが、あつさりと交わされ、左からの正拳を左頬骨が砕ける音が響いて、最後の志士は地面にうつ伏せで倒れ込んでいた。

此の浅草は人通りの多い所で在る。木賃宿から西通りの道幅の広い場所に左右に野次馬が黒々と集まつていた。八人の志士たちは慌てて起き上がるうとするが、起き上がれる事も出来ない者は、起き上がれる者が手を貸して遣るなどをして、起き上がれる。

町奉行所の同心など、とんでくるわけはなかった。豹馬は衣服のほこりを手ではたき払い衣服を整え乍歩き出す。野次馬が二つに割れた。豹馬が歩き過ぎると、其の場にいた野次馬は八人の志士たちが、互い互いを抱え乍歩き出し、足を引きずる者や腕の付け根を痛めた者、歩く事すら出来ない者など様々に、苦痛に顔を歪めて居る志士たちは逃げ出した。

西の道幅の広い場所から『笹乃屋』へ戻り、店へ入ろうとする豹馬。

「玉置様」

と声を掛けられた。暖簾を潜ると女将のお千代ら奉公人たちが店先の床板、地面に正座をして居た。

「御店と命の恩人どす」

「其れほどでも在らへんでえ」

「いいえ、玉置様がおいでにならへんかったら、私の御店や私らおなごは皆、手込めにされていました」

「なああに、奴らをからかっただけやあ」

「いいえ、助けて貰ったんどっせ」

「お千代さん……」

「はい。何どすえ、玉置様。何ぞ、御礼をしとうござ座いますえ。何なりとおっしゃって下さいませえ。」

「だったら、何んか喰わせて呉れますか。儂わい 今、めっちゃくちゃ腹がへってますねん」

「はい。玉置様。直ぐに御食事のご用意を致しますよって、ささ

あ。御上がり下さいませえ。お咲。足桶のご用意をしてお呉れやすええ。」

「はい」

お咲をして、店先から井戸場の方へ駆けだしていった。

「さあさあ。玉置様、此方で御掛けに成って御待ち下さいませえ」

「ああ……」

豹馬は、お千代に云われるが儘に店先の床板にゆつたりと、腰を降ろすと同時に背中越しに帯びている山刀と見紛う様な武骨な刀身一尺八寸の脇差しを左手で抜き取り出してから腰を降ろして座った。

「た　玉置様。お待たせ致しました。どうぞ、足桶をお使い下さいまし」

お咲は井戸から水を汲み上げて足桶の中に注ぎ込んでから手拭いを二枚持って、其れを豹馬の腰を降ろして居る所へ運んで来た。其れを豹馬は、

「お咲ちゃん。おうきに有難うさん、今日はちゃんと手拭いを使わせて貰うでえ……」

そう云って豹馬は、お咲の純粹なまでの光輝く清んだ眼を見乍、優しいまでの笑みを浮かべて訊ねかけた。

「はいっ」

お咲も、豹馬のさつきまでの戦う武士もののふの様なまで、鋭利な刃物の様に研ぎ澄ました眼差しとは違い、屈託のない好青年の様に優しさに溢れる眼に戻っていた。

「玉置様。本当に有難うございました。私はもしも、玉置様が居られなければ、きっとあの恐ろしい浪人たちに私や女将さんが、手込めにされた上に、他の皆さんも酷い眼に在っていたに違いありません。或いは、あの獣の様な浪人たちに斬り殺されていました。玉置様。本当に有難うございます！」

「あつ。いやあ、そんな……。なつ、何んか照れ臭いからもうう、其の辺でエエからあ……。お咲ちゃん。堪忍やあ」

と、云い乍も店の天井を見上げて頭を掻く豹馬で在った。

「……………」

其れを、お千代は、愛情に溢れる優しき眼差しで二人を見詰めていた。

#### 四



外はまだ暗い霞の中を、寅の七つの刻限（午前四時）の一番鶏が鳴く前には起床し、夜具を直ぐに片づけ終えた豹馬は身支度を済ませて、部屋から出て静かに左側へ歩み出して店先とは反対側へ廊下を進み出ると中庭に繋がる階段を降りて、裏木戸の門を外して引き開けた。

彼は、其処から裏木戸から中庭に廻って行く。中庭の右側に檜の木で造り上げた檜の木木人の前で先ず軀を解す様に、柔軟運動を始める。

最初は腕立て伏せ、三本指立て伏せ、親指立て伏せ、腹筋、直立した体勢からの屈伸、逆立ち腕立て伏せ、逆立ち親指立て伏せ、背筋反り、屈伸などを凡そ、一刻の間に及ぶ、柔軟運動をし終えると、豹馬は祖父玉置晋太郎鷹宗と父玉置兵武之助嚴宗の双方から幼少期の頃より新陰流剣術を朝昼夕と厳しく教え込まれ忠実に厳守している。其の間にも彼は、剣術だけでなく新陰流徒手武術をも教え込まれてきたのだ。

其の徒手武術を始める。

先ず、向う高を始める豹馬。向う高とは、上段から相手の前額を切る技で在る。

彼は中段、下段、八相脇の何れの構えからの打ち込みでも、無刀で受ける事が出来る技を匠に操る。（所謂、柔術や唐手〃空手、拳法の一つで在り、新陰流無刀取りにも繋がる技）豹馬は新陰流の開祖上泉伊勢守信綱公から柳生石舟斎、柳生兵庫助、柳生連也、祖父の晋太郎、父の兵武之助へと兵法を学び、伝承されてきたのだ。

そして、豹馬へと継承されて、彼は更に進化した無刀取りの術、技を完全なものにするべく武者修行中の身で在った。

豹馬は檜の木人を強敵に見立てて見えぬ敵と眼が合つて、二つの視線が絡む。豹馬がより一層、睨み付けると、其の眼は三白眼となつて、相手を威圧する。だが、豹馬の鋭利な刃物の様な眼差しから少しずつ表情が変わり馳て、其の表情は無の境地の表情へと変化し、真つ直ぐに見えぬ心の敵に向かい合う様にして、彼は右足を前に大きく前後に股を開いた姿勢で、ゆっくりと背を丸め双手先を地面五寸の辺りまで下げた。

我が身を真ん丸に低めるのは、かの柳生石舟斎が編み出した『一円』とい、う身構えで在る。心で見えぬ敵が上段に構えた刀身は夜明け前の薄暗い空を貫く様に、太刀の光の穂先をためていた。刃渡り二尺八寸は在るであろうと見る刀は袈裟掛で来るのか、横一文字から薙ぎあげて来るのか、其れとも一刀両断で来るのか、或いは連続で突いて来るのか。

豹馬は、何の様な技で在つても、速やかに対処する事で勝敗を決するのだと、祖父晋太郎から教えられた。豹馬は左向きに身構え、見えぬ敵は正眼のに構えている。搜りの様な攻防が繰り返され、見えぬ敵は力是在りそうだったが、スピードに致命的欠陥が在った。此を見切ると豹馬は相手のリズムに合わせる事を止めた。見えぬ敵が顔面を狙つて出された左からの突きを豹馬は正中線上に構えた前手を其の儘前に出す。と、見えぬ敵の突きは軌道をズラされ、逆に豹馬の差し出した貫手が見えぬ敵（木人）鼻っ柱を捉えた。通常で在れば眼を狙う処だが、其れでは試合ではなくなる。しかし、見えぬ敵は負けを認めなかった。差し出された前手を叩き斬り落とすうとしてきた。豹馬は此を腕を引いて避けるのではなく、相手の腕の上に滑り廻らせる様にして、其の手で短い正拳を打ち込んだ後、

更に足払いで倒す様に攻撃した。

### 続きの其の(3) (前書き)

豹馬が千葉道場で、次々と門下生たちを血祭り叩きのめす、壮快さは……

### 続きの其の(3)

#### 四

京橋桶町。

此处、江戸鍛冶橋門外京橋桶町には江戸の三大道場の一つ、千葉道場が在る。此の道場主で、名を千葉定吉とい、う北辰一刀流の剣客で後継者の千葉周作の実弟として、此の桶町に道場を構えて門下生を幾人も排出している。

一方、兄の周作はお玉ヶ池に道場を構え、三千人以上もの門人を4人送り出していた。

豹馬は、千葉桶町道場と書かれた表札が立派な門構えに掲げられているのを見て、豹馬は、

「おおお。流石は江戸の三大道場と云われるだけの事は在るでえ……。特に、此が天下の千葉道場やなあ……………」

と、云つて屋敷内に在る稽古場を伺い乍、辺りを見廻す。堀越に茂っている山桃の葉の一つ一つを眺めた。葉は一つ一つに、厚ぼったく真昼な太陽の陽射しが溜まっている。

立派な正門で感心し乍、辺りを見廻していた。

豹馬は、中に入った。森閑としている。玄関に立った。

「御免っ」

とい、うと、

「はいっ。何か、ご用ですか」

千葉道場の門下生の一人が応対に出て来た。

「此処に、土佐藩の坂本龍馬（竜馬）とい、う御人は、居はりますか」

「龍馬先輩に、何かご用ですか」

「うんっ。まああそんなとこやなあ……………」

豹馬は上目遣いで門下生の顔を見て不適に、ニヤリと嗤った。

「はあっ。暫しお待ちを、して貴殿のご姓名を伺いたいです」

「儂<sup>わい</sup>が、坂本龍馬と戦いに来た。者やなあ……………」

「そ 其れは。龍馬先輩に、試合の申し込みか貴殿……………」

「まっ。…………そう云う事やあ……………」

「貴様。無礼な奴だ。龍馬先輩が出るまでもない。こんな奴は、俺たち門下生の誰かが掛かりさせて叩きのめして呉れよう」

「そいつは無理やなあ……………」

とい、うていると、門下生のかん高い声音に、気付いた他の門下生たちがどやどやと、黒光りする床板を打ち鳴らし乍玄関に六人

ほどの屈強な若者たちが出て来た。

「どうした。伊丹、何を騒いで居るか<sup>お</sup>」

六人の中から千葉重太郎が前に出て豹馬と伊丹某の双方の遣り取りに割って入った。重太郎は、其の千葉定吉の嫡男で、『桶町の竜』の異名を取った剣客だ。

「あつ。若先生。こ奴が、龍馬先輩に他流試合を申し込みに来た……」

「ほおおお……中々、良い眼をしているなあ……！」

重太郎は、豹馬の顔をじつと見ている。

「そう云うあんたも、エエ眼をしてるでえ。流石は『桶町の竜』と呼ばれて居るだけの事は在るでえ……」

とい、うと、豹馬も、重太郎の顔を見詰めて、含み嗤いを浮かべ乍、双方の眼に煌めく眼光が、互いを牽制をする様に、

「して、ご貴殿の名は、」

「十津川郷土新陰流。玉置豹馬やあ……」

「十津川の玉置殿と云ったかな。……十津川と云えば、大和国だったかなあ……。だが、あいにくと、龍さんは外出中だ。また、非お改めて御越し頂きたいのだが、如何か」

「……なら、待たせて貰えるけえ」

とい、うと、門下生たちが、物凄い眼で豹馬を凝視し乍、激怒した。

「わ 若先生。こんな奴、我らが、叩きのめして呉れます。どうか御許し下さい!!」

門下生たちが口を揃えて、重太郎に嘆願した。

「御願ひ致しまする」

「若先生!!」

とい、うと門下生たちは豹馬に侮辱された腹いせに無理矢理に稽古場へ引きずり込んで遣ろうと思った。

「ほうら、此の木太刀で掛かって来いっ」

と、試合を強要して来る。とうとう豹馬も仕方なく、

「そんなら相手をつかまつる」

とい、うて、対帯の背中越しに無造作にぶち込んでいた山刀と見紛う脇差しを抜き取って、後ろへ軽く放り投げると木太刀棚に、旨く一番上の棚に乗せていた。

「儂わいの流儀は無手なんやあ……」

「貴様も、其の木太刀を取れ……」

先ほどの伊丹とい、う若者が、最初の相手だ。



「此の儘でエエねん……………」

『一円』の身構えを見せた豹馬に、僅かな乱れもない。無刀取りの極意は、間合いを観察する間積もりに在った。我が身を切らせる間のうちに伊丹の木太刀を近寄せ、伊丹が斬り込んで来る太刀筋の行方を確かめつつ、其の斬り出す動きの拍子を読んで動きの裏を取らねばならない至難の技で在る。

『一円』の身構えは、敵を一刀両断の動作に誘い込む為のもの  
で在った。

と、同時に伊丹は木太刀を青眼に身構えて、双方とも向かい合う。  
豹馬は何の見せかけの動作・攻撃（フェイント：a feint  
【用例】フェイントを掛ける）もなしに、一気に双拳を縦拳にして  
胸の前で回転させる。縦流転拳の攻め技。仰け反る伊丹に更に直線  
の正拳の連打をぶち込んで行く。伊丹は木太刀で豹馬の動きを左  
右に振り乍、払いのけ様とするが、豹馬の連続攻撃には歯が立たな  
い。

こうなると今度は留めが刺せない。やったの事で伊丹を引き倒  
し、馬乗りに成って拳を振り上げる停止を取った。既に木太刀柄  
から豹馬は、伊丹の双手から奪い取っていた。

「降参か！」

伊丹は首を縦に盛んに降っていた。豹馬は相手が闘いを放棄し  
たことを確かめる為、言葉による返答を求めた。

「こ、降参だ。か、勘弁して呉れ〜っ」

豹馬の圧勝だった。定吉、重太郎、千葉道場の門下生たちは眼を剥き乍、驚愕しざわめきの声を上げている横でただ一人豹馬だけが何かを考え込んでいた。すると、まるで爬虫類の様な顔の体格の良い若者が、木太刀を手に取って立ち上がり稽古場の中央へ歩み出した。

「次は俺が相手じゃ。伊丹の様にはゆかんぞ」

とい、うと互いの間積もりを詰めて向かい合う。豹馬は利き腕左を前に身構え、二人目の佐々木卯一郎と云う男は上段に身構えている。豹馬はスルスルリと激尺の間合いへと詰めていき。

豹馬は相手の面打ちを誘う。次の瞬間、佐々木は上段から切り掛かって来たと、同時に左足が床を踏み鳴らし乍、左手で木太刀の真ん中あたりを握り締め乍も、右手で佐々木の握る柄に手を掛けて一瞬で握り締めていた。其の儘、右手で捻り廻し奪い取っていた。佐々木はのめって仰向けになり乍一回転して床へ転がり落ちる。

佐々木は海老の様に丸まって床を転がり廻っている。

次々に門下生たちが入れ替わり立ち替わる相手を次から次へとあっさり薙ぎ倒し片づけてしまった。此の腕前の物凄さに大勢の門下生たちはタジタジと成って、遂に相手をしようという者は居なくなってしまった。

伊丹、佐々木ら門下生たちとの勝負は豹馬にある疑問を投げ掛けた。

此までは新陰流型に己の工夫を加えていたり、広げたりしていただけで満足だった。だが、新陰流の基本はあまりに拘束が多すぎた。新陰流は手技に優れたものは持っていたが、此の他にも足の運び、

構え方、足裁き（フットワーク/Footwork）、蹴り技、寝技、関節技と闘いにおいて有効なものは多い。要は“形にとらわれ過ぎない事”だった。

稽古場出入り口には外出していた坂本龍馬が、帰って来て、其の一部始終を眼の辺りにして、

（あしも、日根野道場で【土佐藩〓高知県・高知城下南側、築屋敷の日根野弁治ひねのべんじが開いたなが此の道場で在る。

龍馬は和術〓柔術、剣術、居合、太刀、小太刀、槍、長刀、棒術、水練〓水泳、水馬、騎射などのまるで、武芸のデパートの様な道場で在った。弁治が小栗流和兵法“小栗忠順おぐりただまさの一族で在る”を学び、柳生新陰流を学んでいる。其れを弁治は自らの道場では進化した】学んじよった新陰流とは、いささか違ごうちよるが、じゃがあん男の武術は何か物凄かつ。あがな、技前見たらわくわくしちよるがつ）

「いやあ。世の中まだまだ、捨てたもんじゃないけええ……………」

龍馬は稽古場の正面には、千葉定吉お師が座っているのを見て、遙か下座から頭を垂れ下げ、顔を上げると、武者窓から風が吹き込んできて、お師の白髭はくせんをそよがせていた。稽古場にいた重太郎、佐那な、里幾りき、幾久きくの定吉の此の子たちら門下生たちも、振り返り、

「龍さん……………」

「坂本様……………」

「坂本様……………」

「坂本様……」

「坂本っ……」

「坂本先輩……」

「坂本さんっ……」

皆が龍馬を見て、歡喜する。

「しかし、なんじゃ……天下の三大道場へ、たった一人で勝負しに遣つて来るなんざあ……ただの腕と自信じゃあ出来んぜよ……面白かつ奴が、居るもんじゃあのうっ」

「おおお。そうじゃ、名は何んと、云うがぜよお」

龍馬が豹馬に訊ね掛けた。

豹馬と龍馬の二つの視線が絡む。

「十津川郷士新陰  
流……玉置豹馬」

「あしは、土佐郷士北辰一刀流……坂本龍馬ぜよ」

豹馬 がより一層、睨み付けると、其の眼は三白眼と成つて龍馬を威圧すると、龍馬も同じ様に睨み付けて居た。

「さきの御前試合でのあんたの剣名は江戸いやあ。国一番……と鳴り響いて居るなあ……けんど……まだあ、本気に成つてへん

でえ… あんなんちゃうでえ。 あんたの力は、」

「ワハハハアア。 そがいに云われると、 照れるがぜえよおお。 ほつうう… そがいかのおおお…」

「ああつ。 本、 氣、 にさせたいでえ……」

「……………」

豹馬と龍馬の二つの眼光炯々に互いを射る。

「龍馬よ…… 儂も、 其の玉置殿と同じ気持ちじゃよ……。 御前さんはまだまだ、 うちに秘めたる剣が眠っておる。 本当の坂本龍馬を出し見せてみなさい」

とい、 うと定吉は龍馬の本質をもしや、 此の玉置豹馬<sup>もののふ</sup><sub>と</sub>とい、 う男が、 いやあ武士ならば、 恐らく龍馬を目覚めさせる事の出来る本物の漢<sup>おとこ</sup>ではなかりかと、 思っている。 そして、 龍と豹の壮絶なる死闘繰り広げるではなかりかと、 云う思惑が頭の中で描いているのだ。

仮にも、 江戸の三大道場の一つで在る北辰一刀流の千葉道場の師範代を務める重太郎は、 師範代としての立場上此の儘豹馬を帰せば、 江戸中に今回の事を世間に噂話や恥辱的な話を広げられては困る上に豹馬を叩きのめして置かなければ成らないと考えていた。

「あいやしばらく、 玉置殿。 御見事な腕前でござる。 拙者千葉定吉道場師範代の千葉重太郎にござる。 いざ御相手をつかまろう」

「重太郎っ」

「あ 兄上っ」

「兄上っ……」

「兄上様っ……」

「重さんっ……」

「わ 若先生っ……」

龍馬、定吉、里幾、幾久、佐那らは重太郎の発言に誰もが、困惑している。なか、門下生たちは重太郎の言葉に賛同するかの様な喚声が稽古場内に響き渡る。

豹馬は、

「ほう、師範代の重太郎殿は当代の剣の名手と承っています。此の儂の耳にも聞こえていまっさあ。愚武者など若先生にとつては物の数にも足らへんですわあ、何とぞ御赦し頂だい。寧ろ、儂は坂本氏との勝負をつかまつりたき所存。如何か」

「いやあ。龍さんとは何れはにて、願ひ頂きたいでござる。本日は拙者が勝負して頂きとうござる」

豹馬がそう云うと、先刻から散々に遣られた連中らは、

「若先生がせっかく礼を以て御手合わせを所望されるのを、にべなく受けぬのは失礼でござらぬか。ぜひ、御立ち合いの上で龍馬

先輩との勝負を成されては如何なものでござらぬか」

「そうじゃ。そうじゃ……」

と云い出して聞かない。門下生たちは重太郎に仇討ちをして貰うつもりだろうから、仕合をせずに豹馬を龍馬とも闘わせては遣らぬとい、う勢いではやし立てて居るのだ。

豹馬も、此を無理に振り切つて龍馬との闘いを願えば願つても、遺恨を抱く門下生たちは、恐らく五月蠅く仕返しに来るに違いない、後々に面倒を残すより、此処でけりを付けた方が得策かもしれないと考えた。豹馬は再び稽古場の中央へ舞い戻り、

「そんなら一手御相手つかまつろう」

と、相変わらず無刀取りを身構えた。

重太郎は得意とする二間（約三・六メートル）余りの長刀（なぎなたひょうぼうもくろく）

北辰一刀流長刀兵法目録を門下生たちは授与を学んでいたと云われている。無論、坂本龍馬も授与されたのは剣術では無く、北辰一刀流長刀兵法目録授かっている。目録にも、記っされているのだ）を持ち出して来たが、此の長刀に対して無手では、さすがの重太郎も大勢の門下生の前では馬鹿にされた様な気がしてならない。それで、

「拙者が長刀を持つからには玉置殿も木太刀なり竹刀を持たれるがよい。無手で千葉重太郎に相手を仕様とは失礼とは思ひ召さぬか」

と、憤然として云う。重太郎は既に怒り心頭に発している。怒れば心に乱れを生じ、気は平静を破り、闘わずして豹馬の心気には

一分の勝味が浮かんでくる。

「仰せの通り、立ち会いには其れ々々の武器が在るやろうが、……儂は剣は、けんでも、儂が使うのはこっちの拳で諸国で武者修行中の身なれば、此の拳が結構と存するのだが、無手がアカンとの仰せで在れば、此にて御相手をいたしまつさあ……」

豹馬は、紺碧色の小袖の左袖を腕捲りをして、其の左腕は厳しく鍛えれた体躯と忍耐氣力が充実して生まれた左腕を見せる。だが、重太郎や定吉、龍馬、里幾、幾久、佐那、門下生たちらも豹馬のいくら、無手の達人で在ろうとも重太郎の長刀にはかなわないと思っていた。其処で豹馬は懷から、

「儂は、此を使って対手の長刀を奪いまつさかいに、師範代は何処からなりとぞんぶんに御掛かり召されたき……」

稽古用の櫛木扇を取り出して左手に持ち替えて豹馬は左向きに、

「……」

「いざっ」

身構えた。

「此の横着な糞侍めが」

といよいよ怒った重太郎は“田楽刺し”にして遣ろうと、物凄い形相で、鋭く長刀を突き出してきた。必殺の長刀を素早く交わす豹馬の身の軽さ、しかも微塵の隙も決して見せない。流石の重太郎も



「うっん…」

と唸った。

焦れば焦るほど攻め入れ隙は寸分も見当たらない。

豹馬の祖先は伊賀の忍び衆として戦国時代に暗躍して様々な武将から依頼を受けて活動していたのだ。

其の為、彼の一族には皆、訓練を積んだ高い身体能力を駆使して、壁をよじ登り、塀を乗り越え、窓から窓へ、向かいの建物に飛び移る。

【効率的に移動する】とい、うのが密探【スパイ】の基本理念だというが、正に日本の忍術で在る。【中国武術の一つで、軽身功けいしんこうとい、うのが在るのだ】焦燥は心身一ならず、ただ長刀を構えただけで突き出す事が出来ない。短気は益々心の乱れとなつて胸を塞ぎ、吐く息も次第に荒くなる。師範代の此の有様を見ている門下生たちは気が気でない。一同固唾を吞んで微動だにしない。稽古場はあたかも無人の如くシーンとして静寂其のもので在る。

当時の江戸は、『位』の桃井。

『技』の千葉。『力』の斎藤と云われた江戸の三大道場、（坂本龍馬は『小千葉』と、云われていた京橋桶町の千葉定吉道場を云う。武市半平太、岡田以蔵は土佐藩邸宿所から京橋浅利河岸に在る鏡心明智流桃井道場に学び、神道無念流斎藤道場には桂小五郎。長州藩士で後の木戸孝允。倒幕・明治維新の功労者の一人で在る）状況から見れば、此の様な場合、例え仕合に勝利したとしても、後々どのような報復が成されるか容易に想像されるところで在る。

豹馬は荒々しい道場の真っ只中に、獣の様な門下生たちに取り巻かれ、少しの心の動揺もなく、平然として其の師範代で在る重太郎と対峙しているのが在る。其れも重太郎の二間柄の長刀を前に、

稽古用の櫓木扇一本で立ち向かう姿は、全く大胆不敵というか、狂人の沙汰としか門下生たちや里幾、幾久、佐那らの眼には映らなかったで在ろう。此こそが豹馬の一命を賭けて為す技で在り、一世を風靡した名人達人の為す技で在ったので在る。

苛立つてなんとか隙を見出そうとした重太郎が、遂に我慢ができなくなつて

「えいつ」

と二段突き出してきた長刀は、あわや豹馬の胸板を突き破ったかと思うほど激烈なもので在った。

だが、其の瞬間、豹馬は軀を右斜に長刀を交わし乍も、右手で掴み握り締めて左手の稽古用の櫓木扇で打ち上げる様にし、豹馬は其処から廻り込んで重太郎から長刀を奪い取つて其の儘放り投げていた。更に水流の如き流れる様に体勢を素早く立て直し乍、手刀で大きく斬り降ろす様に劈（切り裂く）動作をすると見せ掛けておいて、掌を鞭の様に弾き出し、軀を低め膝を曲げて腰を沈めて掌で（肘は拳や掌よりも体幹部に近い為、其れらに比べてダイレクトに軀の中心からケイを相手に送り込む事が容易で在る。

又、元々硬く丈夫な部位なので破壊力も大きい）で突き飛ばす様に打ち込んで、肘を真つ直ぐに突き出して、肘で外から廻し討ち込んで、肘で突き上げ標的との距離感や角度、タイミング、当たる瞬間の感触などを知るうる武術家で在るから出来る技だ。

接近戦でのつなぎ技で在り、豹馬は肘討ちは、身構えた状態から水平に打つ技術で在り、最も基本的な肘討ちといつても過言ではない。隙のない軌道で打つ。

投げという視点から見た場合、肘討ちを打ち終わつた瞬間は隙だらけといつても良い状態となる。

重太郎と正対した状態から重太郎の首を上から抱え込む様にがつち

りと絞めする技をする。

其の為、重太郎の体勢が低くし乍、此の技を決める事は困難で在り、（敵の首をがっちり絞めする時、抱え込む手の拳を強く握る。更に、拳を右に回転させ乍手首を返し、敵の喉仏を下から突き上げる様にして圧迫する事が大切で在る。と、同時に、攻撃側は己の腰を前に突き出し、背中を後方に反らせる様にして、敵の上体を浮かす。こうする事で、自然と喉仏への圧迫は強まり、敵の動きは完全に停止する）敵を完全にフォールドする事で勝敗を制するのだ。重太郎は完全に口から泡を吹いて、白目を剥いて失神していた。

豹馬は頃合いを見計らって、大喝一声

「うおつりよやあああ」

と勢いよく

此の有り様を見ていた定吉、龍馬、里幾つ、幾つ久、門下生たちも皆、無論重太郎は気を失神し誰もが啞然として声も出ない。聽て我に返った重太郎は、豹馬の前へ、

「す すまぬが、だ 誰か手を貸し手呉れないか……」

とい、うと門下生の二人が重太郎の両肩へ廻り込み肩を貸して両手をつき、丁寧に一礼をして、

「我幼少期より剣術長刀術を学び、未だかつて御身ほど達人に出合つた事がなかった。ご貴殿の様な武士もののふが、此の地上には居ようなど思いもよらず、彼の將軍家三代かご指南役柳生新陰流が此ほどとは、凄絶なるが如き技前。今までの数々の無礼の段も何とぞ御赦し下され」

と頭を垂れた。

此に対して豹馬は、今し方仕合をした本人とも思えない落ち着いた口調で、

「いやいや、愚かな武人の一儼など師範代の足元にも及ばへんですわ。

とかく人は券を学んでも、心の在り方を考えてへん。ただ今の仕合でも術においては重太郎殿の方が遙かに優れているのだが、勝負に勝とうとする心の焦りが、せつかくの百錬の技を鈍らせていたんやなあ。生死・勝負を超越して、心に邪念がなければ、相手の出方に応じて神技の様な技前が出るもので在るでえ」

とい、うと重太郎に手を賃して遣った豹馬は、

「坂本さん。今日は、あなたとの勝負は御預けやなあ……何れは、あなたの眠った魂を、本気儂が引き出したる」

「…………ふううん。そがいかのお。あしは、なんも寝ちよらんきにい。じゃが、おんしの技前を見ちよって、なんか肝が震えがちこつと在りようがぁ」

「あああ……そらああ。良かったでえつ……今日は、いとま暇しまつさああ。ほな。失礼さん。ご免やつしやぁ」

豹馬の凄さを、改めて知りうる事に成った千葉道場の者たちは、武者震いをしていたのだ。

だが、ただ一人の者は違っていたのだ。其れが、坂本龍馬だけだ

ったのだ。

(あしは、また玉置<sup>あいつ</sup>豹馬に出逢う気がしちよるぜよ……………)

龍馬は、そんな気がした成らないのだ。

## 続きの其の(3)(後書き)

坂本龍馬との出逢いが、此処から始まる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5469f/>

---

修羅の如く

2010年10月20日13時30分発行